

日本オースティン協会第 16 回大会プログラム

- 日 時: 2023(令和 5)年 6 月 24 日(土) 受付: 12:10 より
- 場 所: お茶の水女子大学 共通講義棟 2 号館-102 号室
(〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1)
※東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅より徒歩 7 分、東京メトロ有楽町線「護国寺」駅より徒歩 8 分。
※大学ホームページ(<https://www.ocha.ac.jp/access/ochacampusmap.html>)ご参照のこと。
- 参加費: 日本オースティン協会会員: 無料
当日会員(上記会員以外): 一般 1,000 円、学生 500 円(当日受付で支払い)

◆ 開会の辞 (12:40~12:45)

鈴木 美津子(日本オースティン協会会長・東北大学名誉教授)

◆ 総会 (12:45~13:15)

◆ 研究発表 1 (13:20~14:00)

司会: 土井 良子(白百合女子大学教授)

発表者: 古川 博宣(慶應義塾大学 文学研究科 博士課程 1 年)

「ジェイン・オースティン作品に見る推理小説の萌芽:『エマ』についての考察」

◆ 研究発表 2 (14:00~14:40)

司会: 土井 良子(白百合女子大学教授)

発表者: 水尾 文子(龍谷大学教授)

「“a version of *Pride and Prejudice*”: Colm Tóibín, *Brooklyn* における Austen 受容」

◆ シンポジウム (14:50~17:20)

テーマ: 「摂政時代の女性／移動／旅——オースティン、バーニー、バーナード」

司会: 久野 陽一(青山学院大学教授)

講師: 新井 潤美(東京大学教授)

講師: 吉野 由利(学習院大学教授)

講師: 志渡岡 理恵(実践女子大学教授)

◆ 閉会の辞 (17:20~17:25)

問合せ先: 日本オースティン協会事務局

〒790-8578 松山市文京町 4-2 松山大学新井研究室内

E-mail: harai@g.matsuyama-u.ac.jp

日本オースティン協会第 16 回大会発表レジュメ

【研究発表 1】

ジェイン・オースティン作品に見る推理小説の萌芽：『エマ』についての考察

古川 博宣（慶應義塾大学 文学研究科 博士課程 1 年）

Jane Austen の主要 6 作品には、その構成や語り口とヒロインの役割に推理小説を思わせる側面がある。Austen の時代には、推理小説というジャンルは確立していないが、後の推理小説作家たちが Austen の洞察や文体から推理小説に適した要素を汲み取ったのではないかと、というのが発表者の着眼点である。6 作品のどのような要素が後のどのタイプの推理小説に近いのか、また、ヒロインがどの程度、探偵らしいのかを検討した。

まず、*Northanger Abbey* では、ヒロイン Catherine がゴシック小説の主人公になったような気分で想像を逞しくする。彼女には詮索好きで怪しいことに敏感という探偵の素養があり、招かれた屋敷で、General Tilney がかつて妻を殺したのではないかと妄想する。しかし、恋人の言葉で現実を目覚めること、Austen がゴシック小説の決まりごとを逆手に取っていることから、本作はゴシック小説からの決別宣言と言えよう。

次の *Sense and Sensibility* のヒロイン Elinor は、聞き役になって情報を集め、妹 Marianne の相手として誰が相応しいかという課題を解明する。小説の終盤で、10 ページに渡って Elinor が Willoughby を問い詰める時の口調がまるで犯人を尋問する探偵のように見えることから、探偵ヒロインの誕生と捉えたい。

Pride and Prejudice の最大の謎は、Darcy と Elizabeth が結婚するののかという点である。二人が踊りながら会話をする場面で、オースティンは、Darcy が不機嫌になる理由をきちんと二つ提示している。予め重要な手がかりを読者に提示する公平さに加え、謎の提示と解決、さらに大きな謎や、誤解を誘う罠という連鎖で構成されている点も推理小説を予見させる。Elizabeth は観察力が鋭く、証拠に基づいて論理的に推論する力があって、探偵ヒロインと呼ぶにふさわしい。以上の作品では、ヒロインが探偵らしい活躍をし、推理小説の要件を満たす語り口が確認できるが、後半の 3 作品は厳密に言うと推理小説と見なしにくい。

例えば、*Mansfield Park* の Fanny Price は、他のヒロインと比べると地味な存在で、周囲の人々の意見に惑わされない強い正義感（カントの「提言命法」）が行動規範である。一方、終盤で Edmund が、言い寄る Mary と決別する場面は、例えば『マルタの鷹』のラストシーンのように見える。ダシール・ハメットも少年時代に『純粋理性批判』を読んでいたことを考えると、本作はハードボイルドに通じるところがあると言えるのではないかと。

一方、*Persuasion* は、8 年前に一度婚約した Anne と Wentworth が再会するところから始まる。自由間接話法が多用されていて、Anne の独白のように見える部分が多いこと、結末が最初からわかっていると言ってもいいことから、推理小説の中の、倒叙物 (inverted story) と言われるジャンルを想像させる。Anne の相手として Wentworth が最適であることを決定づける証拠の手紙が Anne の旧友 Mrs. Smith によって最後に示される点もこの形式と一致している。

さて、今回の研究の最大の発見は、*Emma* が厳密には推理小説と言えないということであった。本作では、Emma も他のどの登場人物も探偵の役割を果たしていない。Emma は、友人の Harriet を自分の思い通りに動かそうとする策略家であるが、一方で、Frank Churchill が Jane Fairfax との婚約を隠すために打った芝居に Emma 自身も騙されるなど、この作品からは、陰謀の気配が感じられる。その Frank も Mr. Perry の馬車について口を滑らせて、Jane との文通が露呈しそうになるというように、Austen の巧妙な語り口が絶大な効果を挙げている。実際、終盤で Emma が真相を知った時に「偽善と欺瞞とエスピオナージュと裏切りの世界だわ」と叫ぶ場面では、espionage という当時の新しい言葉が使われており、本作にはスパイ小説の萌芽が見られる。

何人かの批評家や P. D. James までもが *Emma* を推理小説だと誤解しているのは、Austen がこの小説を 2 回以上

読むことを想定して書いたためだと思われるが、Austen の狙いは、Emma の勘違いを皮肉ることであろう。真相を知る前の読者が謎と感ずることも、真相を知ってからは笑いの種になるわけで、皮肉と謎解きは、語り口の面で表裏一体の関係にある。Austen は、笑いでカバーしているが、実は、人間性の暗い面、偽善や裏切りなどへの洞察力が鋭かったのではないと思われる。本発表では、このような観点から Emma の大胆な構成と緻密な伏線について分析したい。

【研究発表 2】

“a version of *Pride and Prejudice*”: Colm Tóibín, *Brooklyn* における Austen 受容

水尾 文子(龍谷大学教授)

Jane Austen から影響を受けた後世の作家を挙げれば枚挙にいとまがない。メディアを通じて Austen への情熱を語る現代英語圏作家が多いなか、Austen の影響を作品に明確な形で織り込む作家もいる（たとえば、Ian McEwan は *Atonement* の題辞に *Northanger Abbey* からの抜粋を掲載）。現代アイルランドを代表する Colm Tóibín (1955 -) もまた、自身の創作活動における Austen の影響を積極的にメディアに語る作家の一人である。*The Heather Blazing* (1992) をはじめとして祖国アイルランドの人たちの日々の営みを描いた作品を数多く発表してきた Tóibín は、2009 年に発表した小説 *Brooklyn* を「*Pride and Prejudice* の翻案 (“a version”)」だと明かしている。*Brooklyn* は、アイルランドが深刻な経済危機に瀕していた 1950 年代前半を舞台に、アイルランド女性 Eilis Lacey のアメリカ移住を描いた作品である。職を求めてアイルランドの田舎町からブルックリンに移住した Eilis が、家族や祖国への思慕の念と自身の人生とのあいだで葛藤する様が描写されている。作者本人が「翻案」と言うものの、*Brooklyn* には、Elizabeth が Darcy と出会うあの有名な舞踏会の場面を彷彿させるダンスパーティの場面を除いて、*Pride and Prejudice* を想起させる場面は見られないし、Eilis と Elizabeth には類似点がないように見える。では、Tóibín が *Brooklyn* を「*Pride and Prejudice* の翻案」と呼ぶ意図はどこにあるのだろうか？ 現代英国小説における Austen 受容については、Ian McEwan, *Atonement* への影響 (Juliette Wells)、1950 年前後の女性作家の小説への影響 (Maroula Joannou)、さらには、インド映画における Austen 受容 (Stephanie Jones) まで様々な研究が行われてきたが、アイルランド移民に注目した Austen 受容の研究は行われていない。本発表では、*Brooklyn* が 1950 年代のアイルランド移民の文脈を紡ぐうえで、*Pride and Prejudice*、ひいては Austen 作品がどのように貢献しているのか、という問いを検討したい。

‘Reflections on Austen’ と題したインタビューで、Tóibín は、Austen が描く内気な登場人物の「豊かな感受性 (“a rich sensibility”)」に感銘を受けたという。そして、*Pride and Prejudice* の Mrs Bennet や Lady Catherine de Bourgh といった強烈な個性を持つ登場人物を絶賛し、Lady Catherine のような登場人物がヒロインの「豊かな感受性」にどのように働きかけるかという点に注目して、「*Pride and Prejudice* の翻案」の *Brooklyn* を書いたという。作品冒頭から読者の心に刻まれるのは、Eilis の家族の中に漂う沈黙である。この沈黙には、1950 年代のアイルランドの厳しい経済事情が反映されていることが少しずつ詳らかにされる。沈黙を引き立てるのは、Eilis を描写する語り手の視点である。たとえば、外出先から帰宅する姉 Rose を Eilis が自宅二階の窓から見下ろす作品冒頭の描写 (3-4) をはじめ、語り手は、傍観者としての Eilis を強調する。同様に、Eilis の心理描写を通して他の登場人物の態度や表情が窺える場面 (5) には、観察者としての Eilis の人物像が浮き彫りになる。また、作品に登場する Miss Kelly と Mrs Kehoe という Eilis に対して好意的ではない二人の人物が、祖国と新天地との狭間で葛藤する Eilis の決断の鍵を握り、Tóibín が言うところの Eilis の「豊かな感受性」を引き出す役割を果たす。

本発表では、Austen 作品についての Tóibín のインタビューとエッセイを手掛かりにして、*Pride and Prejudice* に、Eilis と上述の二人の人物との関係性と「豊かな感受性」の造形に Tóibín が受けた影響を探りたい。さらに、傍観者かつ観察者としての Eilis の人物描写と、祖国 (実家) と新天地 (Mansfield Park) との移動という共通点から、*Mansfield Park* の Fanny Price の人物描写にも、*Brooklyn* における Austen 作品の影響を考察したい。

以上のように、Eilis の心理描写を辿っていくと、*Brooklyn* において Austen 作品の影響を受けて Eilis の「豊かな感受性」を描く先に Tóibín が志向したものは、プロットに着目してアイルランド版 *Pride and Prejudice* を創作するこ

とではなく、アイルランド移民の一女性の個人の人生に焦点をあて提示することにあるのではないだろうか。*Brooklyn* は、近年掘り起こされ注目されているアイルランド移民女性の口述歴史 (oral history)、これまで沈黙されてきた声に呼応し、Austen の手を借りて祖国アイルランドの歴史を小説家の立場から補完した試みであると言える。

【シンポジウム】

摂政時代の女性／移動／旅——オースティン、バーニー、バーナード

司会：久野 陽一（青山学院大学教授）

講師：新井 潤美（東京大学教授）

講師：吉野 由利（学習院大学教授）

講師：志渡岡 理恵（実践女子大学教授）

文学はつねに「移動」＝「旅」と分かちがたくあった。*Travel Writing 1700-1830: An Anthology* (Oxford UP, 2005) の序文の冒頭で、編者の一人 Elizabeth A. Bohls は、西洋文学の出発点の一つであるホメロス『オデュッセイア』からすでに「移動」＝「旅」の文学であることを指摘している。近代に限ってみても、よく知られているように初期小説の代表作 Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (1719) は同時代に人気のあった旅行文学のフォーマットを利用している。ここから、小説と旅行文学をめぐるフィクションとノンフィクションの関係について考えることもできるだろう。今回のシンポジウムで焦点を当てたいのは、この「移動」＝「旅」の文学と「女性」の関係である。ノンフィクションに限ると、男性に比べて、女性の著者による旅行記は必ずしも多くない。Lady Mary Wortley Montagu (1689-1762) は大使の妻として、1716 年から約 2 年間、オスマン帝国時代のトルコに滞在した。このときに書かれた書簡は彼女の死後に出版されて大きな話題になるが、彼女のケースは極めて例外的であった。しかし時代が 18 世紀末に進むにつれて、多くの女性がそれまで以上に「移動」＝「旅」を経験する機会が増えるに従って、たとえば Mary Wollstonecraft, *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark* (1796) など、女性作家による重要作が次々と登場するようになる。ここでは、主に 19 世紀初頭の摂政時代のイギリス国内外の「移動」＝「旅」の文学の諸相を、3 人の女性からひもといていきたい。（文責：久野陽一）

ジェイン・オースティンと女性の「移動」

新井 潤美

ジェイン・オースティンの手紙は姉のキャサンドラに宛てたものが大部分であり、姉妹のどちらかが親戚や友人の家を訪問したときに書かれている。それを読んでいると、彼らがいつ、どのようにして帰宅するか、あるいは次の訪問先に移動するかというのが常に重要な問題だったことがわかる。兄が何日にどこに行くのでその馬車に乗せてもらう、といった内容が多く、当時のこの階級の女性にとって、移動の手段は主に男性が提供するものだった。*Pride and Prejudice* のジェインのように、自分で馬に乗ってよその家を訪問したり、*Mansfield Park* のファニーのように、健康のために乗馬をする女性もオースティンの作品に書かれているが、いずれの場合も乗馬での移動は結果的に苦痛をもたらす。馬車という移動手段も、*Northanger Abbey*, *Mansfield Park*, *Emma* に見られるように、女性にとって恐怖や不快、不和といったネガティブな結果をもたらすものとして描かれている。本発表ではオースティンの手紙や作品におけるさまざまな移動手段に目を向け、この時代の「女性の移動」がどういうものであったかを考察していきたい。

Madame d'Arblay として国際情勢に強いられた約 10 年間のフランス生活から帰国した Burney の長編小説 *The Wanderer; or, Female Difficulties* (1814)は、発売前に完売するほど、英国読者が待望した作品であった。しかし、「夫」の追跡を逃れるため身元を隠しフランスから逃亡してきたヒロインを冷遇する 1790 年代のイングランドを描く作品は、*The Quarterly Review* 等の酷評により評価が急落し、Burney の作家生命自体も致命的な打撃を受けた。1980 年代に版を重ねるまで、文学史上彷徨える作家となったとも言える。本発表では、Sydney Owenson の *France* (1817) の書評等も視野におさめながら、当時の文壇の排他的傾向と英国女性作家に求める役割を検証する。また、Burney が書簡・日記に記した女性の旅人特有の苦悩に注目し、「謎の女性」としての人物造形のため描写が抑制されたヒロインの心理に理解を深めたい。

移動、社交、表象——アン・バーナードの希望峰への旅

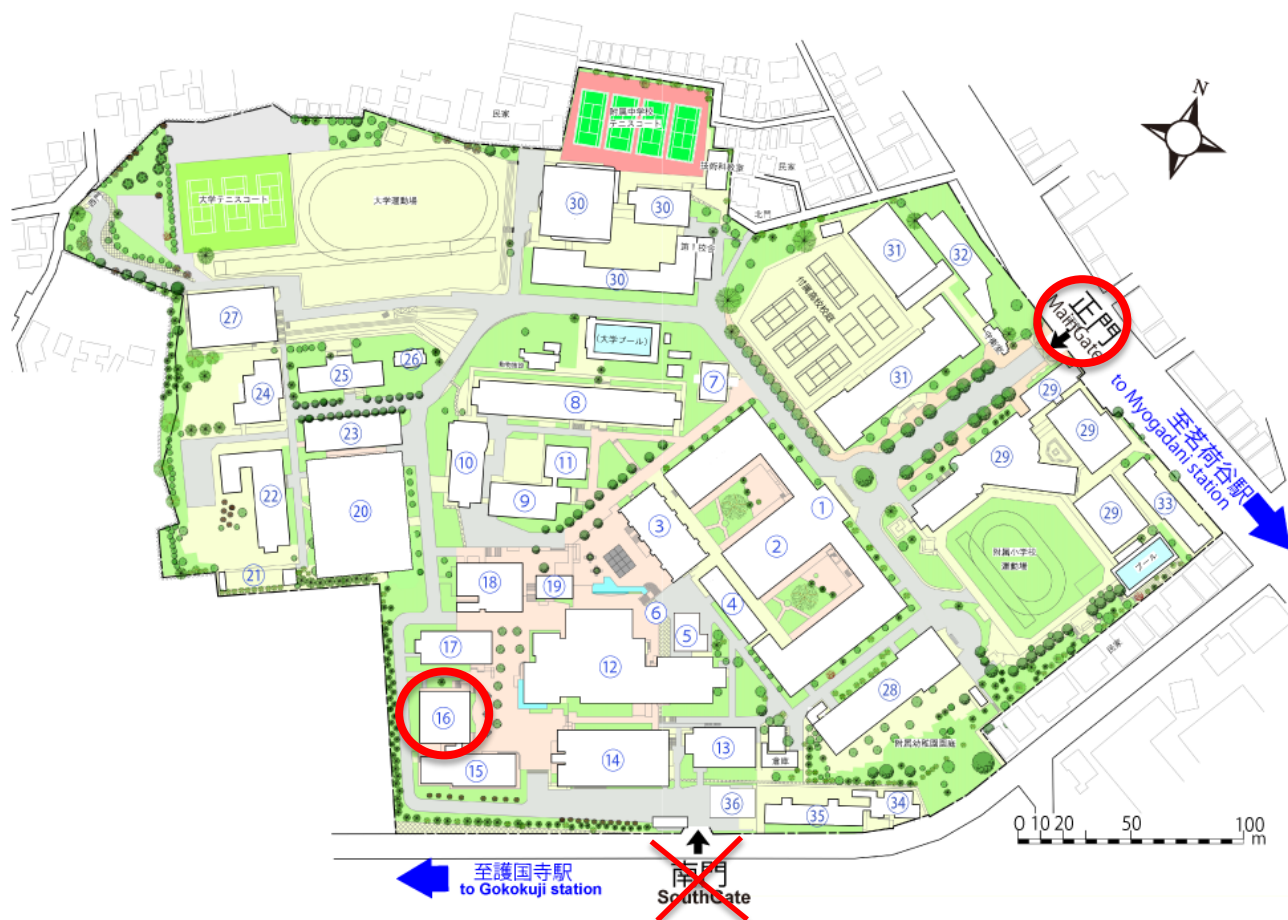
志渡岡 理恵

スコットランドの伯爵家に生まれ、“Auld Robin Gray”の作者として知られる Lady Anne Barnard (1750 -1825)は、1797 年にケープ植民地の書記官に任命された夫と共に約 5 年間、南アフリカに滞在した。不在の総督夫人に代わり城で軍人たちをもてなし、テーブル・マウンテンに登り、奥地を旅するなどして活動的に過ごした彼女は、自らの経験と見聞を手紙に綴り、絵に描いた。彼女が書き送った書簡はまとめられ、約 1 世紀後の 1901 年に *South Africa a Century Ago* というタイトルで出版された。本発表では、ケープ植民地において総督夫人の代理を務めたアン・バーナードの多様な移動と社交のありように注目する。彼女の移動はどのような理由・手段によってなされたのか。社交術に長けていたという彼女に期待された役割とは何だったのか。彼女はその期待にどのように向き合ったのか。これらの問いを出発点に、アン・バーナードの南アフリカ滞在記を再評価する。

【交通アクセス】



【キャンパスマップ】



【入構にかかる諸注意】

- 正門から入場ください。
- お茶の水女子大学に入構する際には、安全管理上の理由から、大会プログラム等の提示が求められます。本プログラム（1 頁目）を事前に印刷して持参いただくか、スマートフォン等で保存いただくなどし、確認が求められた際に対応できるよう準備ください。
- 正門守衛所にて来学者用のストラップ・ホルダーが配布されますので、入構後は着用をお願いします。また、お帰りになる際には必ず正門守衛所に返却をお願いします。